

平成25年度資源評価票(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成25年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 ニシン

学名 *Clupea pallasii*

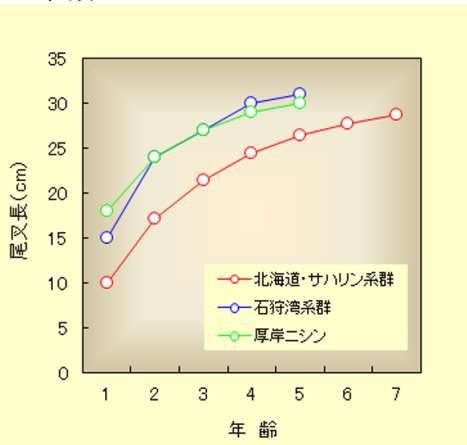
系群名 北海道

担当水研 北海道区水産研究所



生物学的特性

寿命: 6～7歳(地域性ニシン)、10～18歳(北海道・サハリン系群)
成熟開始年齢: 地域性ニシンは2歳(100%)、北海道・サハリン系群は4歳(50%)
産卵期・産卵場: 1月～5月上旬、上の国から稚内にかけての沿岸、サロマ湖、野付、風蓮湖、厚岸湖・湾、湧洞沼、噴火湾周辺
索餌期・索餌場: 北海道全域
食性: カイアシ類、端脚類、オキアミ類、魚類(卵・仔稚魚を含む)
捕食者: 大型魚類、頭足類、海産ほ乳類

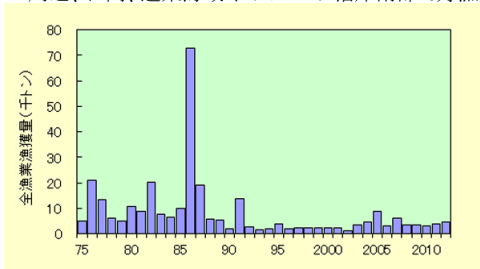


漁業の特徴

ニシンは沖合底びき網漁業(沖底)および刺網、定置網漁業などの沿岸漁業によって漁獲されている。沖底では、日本海で秋～春季、オホーツク海で周年、太平洋岸で秋～春季に漁獲されている。沿岸漁業では、日本海沿岸、オホーツク海の枝幸から斜里にかけての沿岸から沖合域、太平洋岸の風蓮湖、厚岸湾・湖、湧洞沼、噴火湾沿岸で漁獲されている。時期と場所によって、成魚、未成魚や産卵群、索餌群など漁獲の対象が異なる。

漁獲の動向

北海道・サハリン系群を主対象に1897年に97万トン記録した漁獲量はその後大きく減少し、1955年以降はごく低い水準で推移している。1983、1988年に北海道・サハリン系群とみられる高豊度年級群が発生したが、資源回復には結び付かなかった。近年は石狩湾系群とみられる集団が日本海沿岸で好漁をもたらすとともに、太平洋沿岸の噴火湾周辺、日高、道東海域やオホーツク沿岸南部で好漁となっている。



資源評価法

北海道のニシンは、北海道・サハリン系群の他に、テルペニア系群、地域性ニシン(石狩湾系群、湖沼性系群)が混在している。また努力量の標準化が困難で、CPUE等の資源量指標値も得られていないため、資源の水準および動向については、1975年以降の漁獲量に基づき判断した。

資源状態

資源水準は漁獲量を基に判断することとし、1975～2012年の漁獲量の最高値72,729トン(1986年)と0の間に三等分して高・中・低位を設定した。2012年の漁獲量は4,598トンであることから、資源水準は低位とした。また、資源動向は過去5年間(2008～2012年)の漁獲量の動向から横ばいとした。一方、2005年以降では石狩湾系群とみられる集団が日本海沿岸で好漁をもたらすとともに、サロマ湖周辺や厚岸湖周辺では湖沼性ニシンが比較的高い豊度で出現するなど、地域性ニシンがまとまった資源を形成していると思われる。



管理方策

数万トン規模の水準にまで漁獲量が回復するためには北海道・サハリン系群の加入量水準が好転する必要がある。低水準期においては時折発生する卓越年級群を適切に管理し、資源回復の可能性を高めることが重要である。日本海およびオホーツク海域の沖合底びき網漁業では、体長22cm未満の割合が10%を上回った場合には操業を中止し漁場を移動するという制限が行われており、このような若齢魚保護への取り組みを継続する必要がある。地域性ニシンの漁獲量は増大の傾向にあるが、産卵群が主な漁獲対象となっている場合が多いことから、初回産卵の保護を目的として刺網の目合規制を行っている地域がある。このような取り組みの拡大が必要である。

	2014年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	-	-	-	-
ABCTarget	-	-	-	-

資源評価のまとめ

- 資源水準は低位、動向は横ばい
- 北海道ニシンを支えた北海道・サハリン系群の来遊が見られなくなった1955年以降、漁獲量は数千トンと極めて低い水準で推移している
- 石狩湾系群とみられる集団が日本海沿岸で好漁をもたらすとともに、湖沼性ニシンが比較的高い豊度で出現しており、これら地域性ニシンの漁獲量は増大傾向にある

管理方策のまとめ

- 数万トン規模の漁獲量に回復するためには、北海道・サハリン系群が高豊度で加入する必要がある
- 高豊度年級群を適切に管理し、資源回復の可能性を高めることが重要である
- 沖合底びき網漁船で行われている体長22cm未満の漁獲規制などの管理措置を、今後とも継続する必要がある

執筆者:村上直人

資源評価は毎年更新されます。